

我以外皆我が師

税理法人TACT高井法博会計事務所(岐阜市)

岐阜市にある税理法人・TACT高井法博会計事務所(以下、高井会計事務所と略称)。1日岐阜駅から車で20分ほどの、どかな郊外風景の一角にある。3階建ての社屋の入り口にある「二期一会」と書かれた筆文字が一際目立つ。

同事務所は、1978(昭和53)年、高井法博氏が岐阜市の自宅にて創業、現在の社屋は1985(昭和60)年に完成した。法博氏と糟糠の妻である眞智子夫人(現・常務取締役)の2人で始めた事務所は、約600社の経営全般にわたるコンサルティング業務を行なう、今や岐阜県下随一の会計事務所となっている。

しかし、現在に至る過程は並大抵のものではなく、さまざまな人の教えと支えがあった。



二期一会|を掲げるTACT高井法博会計事務所

苦学の日々と 後藤静一氏との出会い

高井氏は1946(昭和21)年、岐阜県山県郡山県村(現・岐阜市三輪)にある、沼宮寺という古刹に生まれる。父が二世の仕職を務めた名刹だったが、戦後の農地解放で土地のほとんどを失い、生活は行き詰まった。

父が代用教員の職に就いてから生活は少し持ち直したが、その父が結核で倒れてからはまた苦しくなる。生活保護で支給されるわずかなお金では食えるのがやっとだった。母は朝早くから夜遅くまで田畑に出て働き、高井氏は新聞配達に勤しむ。そんな日々が続いた。

その後、時期、父は回復へ向かったが、中学3年の夏、今度は脳溢血で倒れた。高井氏は目の前が真っ暗になった。父のことが心配であったのと、高校進学の話が閉ざされてしまったかのように思えたからである。翌朝、いつものように新聞配達を終えて中学へ行くやいなや、担任の先生に就職の世話をしてほしいと頼み出した。しかし先生は、

「お前は成績もいい。何が何でも、高校へ行かなければ駄目だ」

と言い、後日、高校へ通うことを援助してくれる会社を紹介してくれた。世界一のひよこ生産会社・後藤静一氏(通称ゴトウヒヨコ)である。

面接試験に現れた大恩人の後藤静一社長は、担任の先生から事情を聞いたあと、優しい眼差しで、

「この子を私が高校へやりましょう」と二つ返事で承諾した。後藤社長自身、若い時に大変な苦勞をした人で、高井氏の置かれている状況が痛いほどよくわかったのであろう。

高井氏は後藤静一氏の奨学金第一号となり、県立岐阜商業高等学校に静一場の寮から通った。

後藤社長は寮生に、善行を積むことや感謝することの大切さを折に強めて説いた。それは、後藤静一場の社屋「今日も多くの人のお役に立ちますように」に通じるものであった。

入学した県岐商の先生は、いかに多くの先輩が産業界で活躍しているかを繰り返し話し、校訓「不撓不屈」を胸に秘めて堂々と歩めと教えた。

卒業後の進路を決める時、義務とされてきたわけではなかったが、高井氏は迷わず後藤静一場の希望を、採用されることにな



Photo: 高井法博(たかい のりひろ)
1946年、岐阜県生まれ。岐阜商業高等学校卒業。76年、税理士試験合格。78年、12年間勤めた後藤静一場を継ぎ、自ら会計事務所を開業。現在、(株)TACT高井法博会計事務所代表社員。TACTグループ17連121代表。



岐阜県下最大級の会計事務所として仕事に励む社員



T.K.C.創業者の藤原隆夫氏

この邂逅によって、職業会計人としての生き様を教えられ、その後の人生の方向を決定づけるものになったという。

T.K.C.の指導は、高井氏の心の支えとなったと同時に、実務面での恩恵も大きかった。事務所のコンピュータ会計システムの構築にT.K.C.システムを活用することで、それまでであった迷いがなくなり、大きな進展につながった。

以降、T.K.C.主催のほとんどの講演会に全社員で出席し、また逆に、高井氏はT.K.C.から講演を依頼されたり、会計実務の本を出版したりするような関係となった。ここで、全国の師や生涯の友と知り合うようになる。



講演会や総会に示された武藤氏の座右の銘。上段中央、「自利トハ利ヲライフ」の藤原隆夫氏のラインが見える

もう1人の恩人、武藤貞明氏との別れ

高井氏が恩人と仰ぐもう1人を特筆しておきたい。

武藤貞明氏である。

美濃かしわ時代の高井氏の部下であり、転じて創業2年目に高井会計事務所に入社し、草創期の血のにじむような苦労を高井氏とともにした。高井氏が決断に迷った時には、「所長、やりましょう」といって、笑顔で高井氏を励ます。右腕というよりは、分身と呼ぶのが相応しい存在だったという。

1998（平成10）年3月15日未明、交通事故による武藤氏の訃報が届いた。高校時代の友人であるお客様と新規事業の打合せをし、銭湯で飯飯をとったのちの帰宅途中に起きた事故であった。

翌日、武藤家と高井会計事務所との合同葬儀が行われ、多くの参列者が涙にくれた。告別式の席上、幾度も言葉を詰まらせながら高井氏は市事を説いた。

「……私が大変苦しみ、困難にぶち当たった時、あなたが色紙に書いて渡してくれた言葉は、恨みは水に流し、恩は有に知りましたね。私は先生に助けられた。どんなことがあっても何があっても私は先生についていく」と内外に発言し、まさにその通りについてきてくれました。

「……かかるうちは、この3人のお子さんについては、私が生ある限り許していただし、父親代りとして、奥縁と力を合わせ、教育、就職、結婚など、できる限り揃いつ



後藤隆夫氏の後継者、藤原隆夫氏

税理士試験を突破し創業へ

1965（昭和40）年4月、後藤野郎場の社員となった高井氏は経理配属となった。「自分が他人に勝つには人一倍努力しなければ」と、早朝から夜まで必死で働き、「不抜不屈の精神」を実践したのである。

その頑張りが認められ、1年後、関連会社「美濃かしわ」の経理主任となる。その後も次々に昇進し、若くして経理課長兼任で企画室長、社長室長も任せられ、経営企画にもタッチするようになっていった。

しかし隆盛をきわめた後藤野郎場は、昭和10年代の中頃から大きな経営危機に直面し、グループ会社の美濃かしわの存続も危

ぶまれた。こうした中で、高井氏は疲労困憊していき、そしてある日、寮で大量の吐血をした。胃潰瘍だった。イメージは大きく、将来への希望を見失う。

ちょうどその頃、本社の経理課長から税理士資格取得のアドバイスを受ける。心の空洞を埋めたかった時期であり、高井氏はすぐに取り組んだ。この時の勉強の仕方は尋常ではなかった。税制の法令集などは100回以上も読んだという。人の倍やれば大抵のことはできることを経験しつつかんでいた高井氏は、決して諦めなかった。6年後の30歳で念願の税理士資格を取得。働きながらの資格取得は、睡眠時間1時間、通信添削と受験費による独学の闘いだっただけ。その後、後藤野郎場は、新しい活路を見つけ、業績は回復していくことになるが、高井氏は税理士登録後に後藤野郎場を退職し独立する。高校入学時から15年にわたって面倒を見てくれた後藤社長も独立を快く了解してくれ、その後の後援も約束してくれた。

創業の翌年、飯塚毅氏と出会う

準備期間を経て1978（昭和53）年3月、32歳で創業するが、高井氏は創業に当たり、次の3つの目標を立てる。

- ・「ビジネスサポート業」になろう
- ・「情報発信基地」になろう
- ・「社外重役」になろう

これらを一言で言うなら、「お客様の経営支援」ということになる。創業以降の経営計画書にはこの3つが明記されており、経営の拠り所となっている。

創業の翌年、高井氏はT.K.C.に入会する。T.K.C.は、職業会計人の団体で、恩人の一人である飯塚毅氏が、「自利利他」すなわち「自利トハ利ヲライフ」の精神を社是として、1966（昭和41）年に設立した。

1979（昭和54）年10月、名古屋市中でT.K.C.の全国大会が行われたが、高井氏はその際に開かれた飯塚毅氏の講演会に招待され、会場の最前列の真ん中に座って講演を聞いた。厳しい審判の到達点として語られた「職業会計人としてのあり方」と「人間としての生き方」の内容に、会場は感動で満たされ、内外の文獻、学説や史実から導かれた高い志は、一因一城のまである税理士たちをうならせた。そして、義を貫くにおいては意志を曲げず、国家権力とも闘った飯塚氏の生き様は、皆を圧倒した。

「先生のように考え、先生のように生きたい。そして是非先生の指導を受けたい」大感激をした高井氏は、ただちにT.K.C.入会を決めた。

ばいお世話させていただくことを約束する。
 せめて、せめて私の私、君に今してやることのできる仁義であり、恩返しの方分の一部です。
 現在、高井会計事務所の代表室には、後藤静一氏、飯塚敏氏、それに武藤貞明氏の写真が飾ってある。この3人は高井氏にとって特別な恩人である。



高井会計事務所代表取締役 高井 隆一氏

中心)を固めている。

高井氏は創業以来、経営計画書を毎年作成してきた。経営理念に始まり、その年の基本方針、経営戦略、新規事業計画、組織や管理の方針、仕事の基本的な考えなど、高井会計事務所がその年に進むべき道筋が詳細に示されている。それは高井氏が毎年数日間、ほとんど不眠不休で「脳味噌が千切れるくらい」本気で考え抜いた内容である。

経営計画書を重視する科学的、論理的な経営者

TACIT経営研究会という新しい組織によって、高井会計事務所は大きな発展を遂げていく。

「経営計画書は私の命ですから、毎日持ち歩き、枕元に置いて寝ています」
 そしてこの経営計画書という設計図に基

とりわけ同志であった武藤氏への思いは格別で、高井氏はいつも胸ポケットに武藤氏の写真を忍ばせているという。

この3人の恩人以外にも、さまざまなよき用命があった。京セラ会長長の稲盛和夫氏、日蓮宗の竹田日蓮上人、ランチエスター経営の竹田陽一氏なども人生の師と言える。さまざまな師や同僚に支えられた高井氏は、受けた恩を決して忘れることがなかった。

創業3年後、TACIT経営研究会の設立

創業3年後の1981(昭和56)年6月、高井氏は事務所発展の大きな原動力となったTACIT経営研究会(TACIT: The Account Consultation by Takaiの略称)を設立した。

どんな会社であれ、トラブルが起きた時や新しい事業に直面した時、同業者あるいは他の業界がどのように対応しているかを学びたいと考えるものだが、通常その機会は少ない。

会計事務所はそうした情報を持つてはいるが、税法上法で守秘義務が定められており、公表できない。顧問先の要望に何と

づき、科学的、論理的に思考し、実践することが大切であると説く。

「経営者の中には勉強しないで、頑張れ、頑張れと精神論ばかり言う人がいますが、私はあまり好きではありません。そういうやり方では、概して空を巡りで変わりません。いいやり方に変えないと駄目なのです」

並外れた人間力を備えた経営者

高井氏は、出会いや恩を何よりも大切にし、「二期一会」を会社のモットーにするように、精神的、人格的、情緒的、道徳的な要素を大切にするとする印象を一面で受ける。

その一方で、あえてそうした観念的、情的なものを否定し、理知的、合理的、功利的なものを大事にする。
 隆で高井氏を支えてきた眞知子夫人は、高井氏を次のように評している。

「高井は常に戒めて粘り強く、自分の信じる道をわき目も振らず歩いてきました。常に百点満点を目指し、中途半端を許さない人です。自分に厳しく、人には誠心誠意尽くすだけに、だれにもいい加減を許しませんでした」

高井会計事務所の二十年は、高井という桁外れな執念と高い理想を持った、妥協を

かしてはならないものかと苦慮して考案した組織がTACIT経営研究会である。

この会は、基本的に顧問先向上すなわちお客様同士の会である。税理士や会計士がお客様の情報を他社に漏らすと違法となるが、お客様同士が情報を交換することは何ら問題がない。そこを最大限活かしたもので、言ってみれば、高井会計事務所が仲介人になってお客様同士を台詞でお見合いさせるようなものである。

現在、高井会計事務所の顧問先約600社の1分の1に相当する150社ほどが、この会に所属している。顧問先の自主運営という形をとり、会長以下の役員には、主要顧問先の代表者が就任している。

顧問先はTACIT経営研究会に入会することにより、高井会計事務所の個別コンサルを受けられるのみならず、互いに学び合いつながりながら大きく成長できる機会を持つようになる。

一方、高井会計事務所は、「この『共同体』の生みの親のような立場で、顧問先と密な関係で「身内」として仕事を進めることができる。

研究会の主な事業は、企業経営者のための研修会や講演会の開催、管理者や一般社員のための教育訓練の実施、会員の親睦、福祉事業などで、毎月1回の例会(講演会

許さない人、許さない人物によって描かれた歴史なのである。高井隆一氏と高井隆一氏の周年記念誌「二期一会」

物事に対し、人に対し、誠心誠意を尽くそうとするがゆえの、厳しさや優しさ、理知的なものや情的なもの。高井氏はこうした二面性を表裏一体として併せ持つ。また、夢や理想に真摯に向かい、粘り強く、ひたすら努力する。この努力家の原動力は、幼少からの苦勞で培われたハンクリー精神にありそうだが、そして、我以外皆我が師と、恩人や人生の師、同僚はもとより、出会う人みんなに心から感謝しながら交流する。

その人柄から生まれる言動が、社内に十分浸透し、互いに切磋琢磨して成長する組織をつくり出す。社内のみならず、顧問先に関しても同様の関係ができていく。高井氏の人間力、そこから溢れ出る熱情がすべてを飲み込み、事務所を発展させていったと言っても過言ではないだろう。

新しい業容へのチャレンジとこれからの夢

今年4月、高井会計事務所には目名の新入社員が入社した。これについて高井氏は、事務所の業容が大きくなっている点を指摘



代表室で執務する高井法博氏

した。

具体的には、①公会計事業（市町村に貸借対照表の作り方を指導）、②M&A事業（後継者がいない企業の吸収・合併）、③中・大連への事務所進出準備（2年後を目処に進出予定）などがあるという。

高井会計事務所は、今や一大会計事務所へと成長したが、規模拡大について高井氏は淡白である。

「それはお客様の新しいニーズに対応するためでした。新しいお客様、時代のニーズに応えた結果に過ぎません」

最後に、これからの夢について、次のように語った。

「私には、更なる勉強への夢があります。

じつは大学に進学したいと考えています」
かつて、税理士になるか、大学へ進んで研究者になるか、迷った時期があった。経済的事情もあり、大学への道を諦めた経緯がある高井氏は、これからはその時に果たせなかった夢の実現に向かって歩みたいと考えている。

「私は何十年も、数多くの中小企業経営の現場に関わってきました。この経験を活かして、大学で理論を磨き、実践的な中小企業論をまとめてみたいのです。実践と理論が一体となった、本物の中小企業論を後進の方々へ伝えられる時こそ、見果てぬ夢

が完結する時のように思います」

高井氏は、生涯を人のために捧げる覚悟で夢を追う。

DATA

本 社 〒502-0802
岐阜市打越546番地の2
TEL 058-233-3333 FAX 058-233-6776
創業・設立 昭和53(1978)年3月
代 表 代表社員 税理士 高井法博
年 商 8億2千万円(平成21年12月期決算)
従業員数 71名(平成22年5月現在)
(※TACTグループ全社で)
事業内容 税務・会計業務、経営指導および経営助言業務、アウトソーシング業務(人材派遣)、経営再建支援 ほか
U R L <http://www.tact-grcup.com>

経営に名言あり

経営のダムの再建は、基本理念の確認に始まり、技術と資本の蓄積と続きます。

松下幸之助 (本文1ページ掲載)

ガチョウ丸焼きの品質を向上させるためには、伝統技術を守ると同時に、その伝統の向上を図らねばなりません。

裕記焼鳥飯店社長 呉娟華 (本文6ページ掲載)

型にはめようとやってきたことを、個性を出すようにと変えることで、社員が楽しく仕事ができる職場にしようと思いました。

株式会社エスワイフード会長 山本重雄 (本文28ページ掲載)

経営計画書は私の命ですから、毎日持ち歩き、枕元に置いて寝ています。

税理法人TACT 高井法博会計事務所代表社員 高井法博 (本文42ページ掲載)

教えることで、長年やってきたことでも改めることができます。それで管理職以上は研修会の講師になりなさいと言ったのです。

株式会社小林機械製作所社長 森 十九男 (本文56ページ掲載)

アルミハウスには未来があると確信しています。次世代機能住宅には、新しい建築システムが必要になるからです。

SUS株式会社社長 石田保夫 (本文77ページ掲載)

PHPとは

“PEACE and HAPPINESS through PROSPERITY”の頭文字で“物心両面の調和ある豊かさによって平和と幸福をもたらそう”という意味です。お互いが身も心も豊かになって、平和で幸福な生活を送る方策を、人間の本质に照らしつつ、それぞれの知恵と体験を通して提案し考え合いたい。そんな願いのもと、1946年松下幸之助により創設されました。